※発言をそのまま書き起こしたデータを基に、個人情報に関する部分を削除し、文意が通るように修正を行っています。

会場からの質問に対する回答、会場とのディスカッション

木村　　浩　氏（NPO 法人パブリック・アウトリーチ／研究代表者）
土田　昭司　氏（関西大学／再委託先研究代表者）
竹中　一真　氏（NPO 法人パブリック・アウトリーチ／東京大学）
鬼沢　良子　氏（NPO 法人持続可能な社会をつくる元気ネット）
首都圏住民からのフォーラム参加者
日本原子力学会からのフォーラム参加者
谷口　武俊　氏（東京大学）

（木村）　次は、皆さんからいただいた質問に、なるべく丁寧にお答えしていこうと思います。たくさんの質問をいただいております。なるべく全部にお答えしたいのですが、時間の関係もありますので、できるだけこの場で回答させていただいて、答えきれない部分は、このシンポジウムのまとめをホームページに載せますので、そのときに対応させていただきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

それでは最初に、土田先生に向けて、調査に関する質問がいくつか届いておりますので、対応していただければと思います。

（土田）　「性・年齢による意見分布の違いがあるのか？」とか、「参加者が偏らないようにどのような工夫をしたか？」というご質問を多くいただきました。今から 30 年ほど前に、スロヴィックというアメリカの学者が、「リスク認知」という研究分野を確立しました。そこである程度の知見が明らかになっているのですが、今回の調査もやはり従来の知見と同じような傾向になっています。

例えば、男性と女性を比べると、不安に思う人は女性のほうが多いです。これは原子力だからというわけではありません。大抵のものに関してそうです。そして、日本だけというわけでもありません。この春、中国の学生で調査をしましたが、同じ傾向でしたし、どこでも同じなのだろうと思います。

年齢に関しては、高齢者になっていくと、まあいいかというように不安に感じないという反応も出てくるのですが、日本では、特に、お子さんを育てていらっしゃる方が多い 30 代、40 代の女性がどのようなものに対しても不安を感じることが多い、というのは多くの研究で共通して明らかにされています。

職業でいいますと、経営者などは、不安だけではなくて、利益なども考慮して物事を判断するという傾向が強いです。面白いことに、同じ女性でも、結婚もしていない、お子さんもいない、大学生で職にも就いていない、というような女性は、経営者と同じような判

断をします。

先ほど谷口先生も、どんな「世間」にいるかということを強調されていましたけれども、自分の置かれた立場によって、ものの感じ方、リスクの感じ方は違うと思われます。

では、それを踏まえて、参加者をどうやって選んだかということなのですが、200 人くらい応募者がありましたら、これらの知見を考慮して選びたいという気持ちは、正直に申し上げて、当初はありました。しかし、先ほど申し上げたように、首都圏住民の方の申し込みは 8 名でした。手を尽くしても 12 名ということでしたので、それほどきめ細やかな基準で参加者を選ぶというようなことは、事実としては、今回はまったくできていません。ですから、先ほど発表で申しあげたような方法で選ばせていただきました。

ただ、後付けで、アンケート調査などを見て、偏った選び方をしていなかったかを検討しているのですが、先ほど発表しましたように、概ね、社会調査の結果とフォーラム参加者の方の意見分布に違いはないと分かりました。だから、幸運だったともいえるのですけれども、代表性のある構成員を作ることができたのではないかと思っています。

（木村）　ありがとうございます。

それでは次に、私がお答えできるものにお答えしていきたいと思います。

「フォーラムの最終目的を参加者にどのように提示したか、教えてください」というご質問をいただいています。フォーラムの最終目的については、何か答えを出すというような形で用意したのではなくて、お互いを尊重して、どうやって「原子力ムラ」の境界を越えるか、一緒に考えていきましょう。それに賛同してくださる方に、参加をお願いします。という形で提示しておりました。

実際には、「原子力ムラの境界」という言葉自体が難しく、私たちの中でもうまく結論が出ていなかったということもありまして、そこの提示が不足していたというのは反省しているところです。

ですから、「何か答えを出してもらいます」ではなく、むしろ、「一緒に考えましょう」というスタンスで、しかもオープンエンドで話を進めるという形で、目的と進め方を提示させていただいていました。

では、次の質問です。これはサブファシリテーターと参加者の方にお答えいただいたほうがいいと思います。「市民の方が、一度どうかなと思ったとおっしゃっていたが、具体的に知りたい」という話です。では、鬼沢さんからお話しいただいて、もし市民の方でフォローがあれば、お話しいただければと思います。よろしくお願いします。

（鬼沢）　おそらく、サブファシリテーターが関与しすぎた、というところではないかと思うのですが。

グループワークのときに、1 グループにサブファシリテーターが 2 名つきました。私たちの役割は、時間管理と、見える化のお手伝いだったのですね。1 人ではとてもできませんの

で、2名で担当いたしました。

見える化のお手伝いというのは、具体的にはどういうことかというと、付箋に書かれていない発言を拾う、ということです。参加者の方に、発言したい内容のキーワードを付箋に書いて、それを説明しながら貼るということをお願いしていたのですけれども、言葉ではおっしゃるのですが、付箋には書いていない、という場合もあったのです。そういうときに、サブファシリテーターが話の内容のキーワードを書きとって、発言者にこれでいいですかという確認を取って、模造紙に追加するという作業をしました。

そのときに、「この人の発言は拾っているけど、あの人の発言は拾っていない、不公平ではないか」というご指摘を受けたことがあります。我々としては、本人が書かれた付箋が十分だったから拾わない、不十分だったから拾う、という態度だったのですが…。

そういうことではないかと思うのですが、実際に参加された方から見て、いかがだったのでしょうか？

―― 私としては、ああいうやり方をさせていただいたのは初めてだったのと、一番初めにファシリテーターに当たってしまいまして、大変戸惑ったのは事実です。どうしていいか分からない。そういう意味では、サブファシリテーターの方にフォローしていただいて、私はとても助かりました。

私は、今言われたような不公平感は全然感じていないのですね。付箋に書く作業も、時間が足りなくて書ききれないときもあるのです。そうすると、言葉だけで出てくることになるのですが、それをサブファシリテーターの方が書いてくださるということが結構あったので、私としては、大変助かったと思っております。

―― サブファシリテーターの方には、いろいろ自分の言葉を拾っていただけたことと、付箋に自分のコメントを書いていただいた後、若干ニュアンスが違ったのであれば、それを書き直すということもしていただいたので、私は別に問題に思っていません。

ひょっとしたらこの質問は、私が先ほど言った言葉に対するものなのかもしれません。先ほど、おかしいなと思った、と言いましたが、それはなぜかというと、当初のテーマ案と、実際に取り扱われたテーマが変わったことにあります。第1回は当然「『原子力ムラ』とはなんだろうか？」というタイトルだったのですが、第 2 回は、仮のテーマは「原子力ムラにある課題」ということで、原子力の問題点を探るようなテーマだったのですけれども、実際のテーマは「なぜ、原子力ムラは何となく良いイメージを持たれないのか？　そのイメージを払拭するには、どうしたら良いだろうか？」ということで、テーマに「悪いものを良くするには」というニュアンスを少し感じてしまったものですから、そこで、うーん、そういうものなのかな？　と思ってしまったということです。

ただ、実際に話を進めていく中で、偏りは感じられなかったので、最終的には解決したのですけれども。

（木村）　まさにテーマの設定の仕方ということですね。第 2 回の後、やはり何名かの方からそういうご意見をいただいて、これは緊急に対応しなければということで、先ほど竹中さんのお話の中にもありましたが、テーマもひとつだけではなくて両論併記的にしたり、根本的なところまで加えたりして、進めていったということになります。

今、テーマの話になりましたが、関連する質問として、「放射線の影響などのテーマを、敷居が高いとして避けていいのか？」というご指摘をいただきました。このフォーラムの最大の目的が、「市民と専門家がお互いに尊重できること、対等に話せること」だったので、第 1 回から第 3 回までは、どうしても曖昧な（市民と専門家が対等に話し合える）テーマにしてしまいました。第 4 回で、少し専門的な話に踏み込もうという形だったのですけれども、時間が十分に足りませんでした。というような経緯があって、時間との戦いだなというところではあったのですけれども。

放射線の影響や、原子力の安全性といったテーマについて、参加された方は、実際に話し合ってみたかったでしょうか？　そして、話し合ってみたいとしたら、どのくらいのタイミングで話し合えばよいと思いましたか？

――　私としては、やはり時間が本当に足りなくて、もっと言いたいことはたくさんありました。今、木村先生が言ったような話題は、話し合ってみたかったです。

タイミングなのですけど、やはりある程度雰囲気が熟してこないと。初回からその話題に入るのは大変難しいと思います。ですから、例えば 5 回あったら、3 回くらいまでは無理ではないかと思います。回数を経てくると、ある程度雰囲気的にそろそろ熟してきたかなというときがあると思うのですね。そういうときに出していただく話題かなと私は思います。

――　すみません、「放射線の影響」というのは、具体的にはどういう内容なのでしょうか？

（木村）　おそらく、健康に対してのリスク、どういう影響があるか、そういうことだと思います。

――　確かに今回はその話は全然なかったのですけれども。本当は、たたき台としてそういう情報を与えていただいてもよかったのかもしれないなとは思います。

どのタイミングで、となると、今回は情報をインプットするというよりは、アウトプットしながら意見交流をしていくという形だったと思うので、タイミングは難しいのかなと。ごめんなさい、私には判断がつかないところです。

――　専門家としてどうかと問われると、十分な時間が取れるのであれば、話題として取

り上げられるだろうという気はします。

今もご指摘がありましたが、事前の予備知識がある程度ないと、実質的な議論に入っていくのは難しいのだろうと思います。そういうこともあって、フォーラムで取り上げることは断念されたのでしょうが、おそらく、予備知識がないと、誤解を招いたり、正しい議論ができなかったり、そういう結果になったのではないかと思います。

（木村）　ありがとうございます。

それに関連して、「フォーラムの記録を読んだが、少し認識がずれているようなところで話が進んでいるところが見受けられた」というコメントをいただいています。

それから、「ベースの知識をある程度提供した上で、こういう話し合いをしたらいいのではないか」というご意見もあったのですけれども、谷口先生、こういうコミュニケーションをやっていくときに、情報の提供と、対等に話していくということのバランスが私は難しいと思っているのですが、そういうことに関して、どのような点に注意したり、どんなことを考えていけばいいのか、何かコメントをいただけないでしょうか。よろしくお願いします。

（谷口）　難しいです。今、たまたま放射線の話が出ていましたけど、放射線の影響の問題を話すとしたら、科学的な情報をきちんと提供するまでは専門家の役割で、そこから先の、例えば安全かどうかという話は、価値判断の問題ですよね。価値判断というのは、専門家も専門家なりの価値判断があるし、一般の人も一般の人なりの価値判断があるので、その議論をぜひやってみたらどうでしょうか。

私が個人的に思っているのは、例えば福島で、専門家の人が「これで安全だ」と言ったということで大騒ぎになったりすることもあるのだけれども、それは市民が安全かどうかということを問いかけるので、専門家なりに真摯に、自分の価値判断を含めて、言っているところがあるのだろうと思います。

しかし、科学的な議論を越えて、価値判断が入ってくるような問題まで専門家に全て答えをもらうことで、今、様々な問題が起きているという意味では、ここはぜひ、専門家にまず情報の提供をきちんとしてもらった上で、専門家の価値判断も聞くし、市民も自分たちの価値判断を話してみる。そういう意識を持った上で、そういうテーマについて話し合ってみるというのは、ひとつあるのかなと思います。

放射線の影響といっても、健康だけを気にする人もいるし、例えば経営をやっている人だとすれば、これで経済的にどうだという問題を意識するでしょう。人によって、そこに何を見ているのかが違います。同じことを見ても、それをいいと思うか、そうではないと思うか、いろいろあるので。ということで、情報提供の問題と、価値判断の問題を、セットでというか、意識して議論するようなことをやってみたら、面白いのではないかと思います。

そのときも、やはりファシリテーターがそういうことを頭の中にちゃんと描いていないとできないので、うまく問題をナビゲーションしていくことが重要だと思います。

（木村）　ありがとうございます。そのときに最も難しいのは、どこまでが科学の問題で、どこからが価値観の問題なのかという切り分けが、人によって一致しない可能性がある。そこをどうファシリテーションしていけばいいのか、ということについてはいかがでしょうか？

（谷口）　そこまで含めてやってみては、と思いますけど。

（木村）　ありがとうございます。次回にはこういう野心的なテーマも、実現可能性を検討しながら、やっていければと思います。

続いて、また参加者の方にお聞きしたいと思います。先ほどは首都圏住民の方へのご質問でしたが、こちらは専門家の参加者に質問ということで、「説明を尽くすことで漠然とした不安を払拭できると感じたのは、どのような場面だったのでしょうか？」というお話です。こちらについて、お答えいただければと思います。

――　フォーラムの中の議論というよりは、実は、16 時半にフォーラムが終わった後、17 時くらいまで、自由に残って歓談する、という場がありました。そこでお茶とかお菓子をいただきながら、ゆったり座りながら話ができる時間があったのですが、そういうときにいろいろお話をしていくと、理解していただけることが多かったです。場の影響もあるのかもしれないですけれども、聞いていただくほうもリラックスして聞いていただける。あるいは、帰りに駅まで歩く道で、ちょっと話をしてみたり。そういう、1 対 1 で話をしている場で、相手の方の反応を聞いていると、「ああ、そういうことだったんですね」「そこまで考えているんですね」というようなご意見をいただけることもありまして、そういうときに、ああ、こういうことで理解していただけるのかな、と感じました。

（木村）　フォーラム自体は 13 時から 16 時半だったのですが、アンケートで「自由に話せる場がほしい」というご意見をいただいたので、非公式的にざっくばらんに話せる場を作りました。今、そのご紹介がありましたが、そういう場について、どんな印象を持たれたか、他の参加者の方からもお聞きしたいと思います。いかがでしょうか？

――聞きたいことを聞けたのは確かにその 30 分間だったのかなとは思います。ですから、私としては、その時間帯は非常に有意義に過ごせたのかなと思っております。

――　私も同じで、課題がなかったので、本当に自分の感情を出せる場所で、とてもよか

ったと思います。ああ、そういうことなのねというのがそこでよく分かったので、とても大事な時間だったような気がします。

（木村）　参加者同士でしっかりと話し合ってほしいということでそういう場を設けたということもあって、何を話していたのかということは、実は我々もまったく知らないので、今、その一端でも聞かせていただいて、ありがとうございました。

それでは次の話にいきたいと思います。これはまた土田先生にお聞きしましょう。「原子力以外の分野で、同様の事例があると思いますが、比較して差異があれば教えていただきたい」というご質問です。

（土田）　確かにありますね。リスクコミュニケーションという言葉もだいぶ浸透してきたように思いますし、それから、サイエンスコミュニケーションというものもあります。サイエンスコミュニケーションのほうは、大きな国際学会ができて、毎年大会が開かれているとお聞きしていますので、市民に対して科学のことをどう伝えればいいのかということは、いろいろな分野で検討されています。

例えば、医療の現場などで、お医者さんも関心を持っています。患者さんに病気のことをどう話せばいいのか。昔は、医者が「手術だ」と言えば患者さんは何も言いませんでしたが、今の患者さんは、「別の方法はないのですか？」と聞いたり、他の医療機関にセカンドオピニオンを求めに行くこともあります。しかも、手術をして間違いなく治るものならいいですけれども、危険性を伴う手術をするとなると、患者さんとのコミュニケーションは本当に大事な問題になります。

あるいは食の安全。あるいは新型インフルエンザ、エイズ。そういったものに関してのコミュニケーションもあります。

ただ、それらは細かい点を見ればそれぞれ違うのですけれども、私のような心理学の観点から眺めると、同じような動きをします。

昔は欠乏モデルといって、知識がないからそういうことを考えるので、正しい知識さえ与えれば専門家と同じになるはずだというモデルが提唱されたこともありました。今は、それはもう完全と言ってもいいくらい否定されています。現在では、お互いに話し合うことが大事であるとどのような分野でも認められています。先ほど、安全は価値判断だというお話がありましたけれど、まさに、1 年太く生きるほうがチューブをつけられて 10 年生きるよりましだという価値観もあれば、1 日でも長く生きたいという価値観もあります。自分だけで生きるわけではなくて、生きてほしいと思っている家族もありますので、話し合いが非常に大事な時代になってきているのだろうと思います。

ですので、個別の分野で確かにいろいろな違いがあるのだけれども、大きな根本のところで共通しているものがあるというのがお答えになるのではないかと思います。

（木村）　ありがとうございます。

そろそろ時間も押してまいりましたので、簡単に対応できるところをお話ししていこうと思います。

「フォーラムの雰囲気をより具体的に知るために、ビデオなどがあれば」というご意見をいただいていますが、すみません、個人情報は一切出さないということで参加者と契約をしています。ビデオは、研究の記録としては撮っておかないといけないものですので、撮ってありますけど、申し訳ありませんが、お見せすることはできません。

「立地地域の人々の思いが触れられていなかった」というご意見をいただいております。確かにその通りだと思っています。ある程度機能するようなものができてきたときに、次の段階として、そういう場面でも使えるかどうかということをやっていきたいなという野心は持っておりますので、今後取り扱っていきたいと考えています。

それでは最後に、「市民と専門家が直接接する機会がないという日常の中で、専門家、または市民がすべきこと、心掛けるべきことなどがあれば知りたいと思います」というご質問に対して、皆さんから一言ずついただいて、質疑応答の時間を終わりにしたいと思います。では、土田先生からお願いいたします。

（土田）　今はインターネットなどでコミュニケーションの道具ができました。これも得手不得手があって、情報格差みたいなものが逆に増しているという指摘もありますけれども、しかし、可能なコミュニケーションはできるだけ活用されるほうがいいと思います。

それからもうひとつは、昔ながらの近所付き合いといいますか、職場での付き合いといいますか、どこかで人とつながっているはずですので、そのつながっている人といろいろな話題に関して話をする。原子力の問題もそのような人付き合いの中で話し合うテーマのひとつに入れていいのではないかと思います。自分だけで抑えこまないで、いろいろな人と話し合うということを、市民も、専門家も、続けていくことで、世の中が少しずつよくなっていくのではないかと個人的に思っています。

（竹中）　専門家の立場から言いますと、市民の方から何かを学び取るという気持ちを忘れないことが大切なのかなと思っています。

私自身、まだ若いということもあって、市民の方に敬意を払って、しっかりその人たちから学んでいくという心がけが、今はできていると思っています。

ただ、それが、専門家として大成して、重鎮になっていって、自分が正しいと思い始めてしまったときから、他の人から学び取ることが徐々にできなくなっていく人もいるのかなということを、若干ながら、見ていて思うこともあるので、専門家は他の人から学ぶという気持ちを忘れないことが一番大切なのかなと私自身は思っております。

（鬼沢）　私たち市民が得ている情報は、実はとても狭い範囲なのではないかと思います。

その狭い範囲の情報の中で、自分自身で判断していることは非常に多いと思います。これは原子力の分野だけではなくて、あらゆる分野でそうだと思うので、自分の考えはこうだ、というものがあったとしても、様々な情報を見たり、聞いたり、話したりすることで、その幅をもっともっと広げていくこと。そして、人と話をすることで自分の価値判断が変わっていくこともあると思うので、そういうきっかけを常にいろいろなことに対して持つということが大切なのではないかと思います。

―― 確かになかなか接する機会はないと思うのですが、私は地元が名古屋なのですけれども、名古屋に比べて東京はいろいろな機会に恵まれていると思っています。なので、アンテナを立てておけば、いろいろ変わった機会があると思います。まさしく今回は変わった機会だったと思っているのですけれども。このフォーラムに参加しなかったら、出会えなかった方も非常に多くいたと思います。

なので、アンテナを立てておけば、東京だといろいろ接点が持てるのかな、と実は思っています。常に関心を持ち続けること。新聞やインターネットでも、いろいろな情報が出ていると思うので、何か機会があったら、あとは思い切ってえいやで行くことが大事なのかなと。フォーラムに応募したのが 8 名しかいなかったというのは、私はすごいびっくりしたのですけれども、最後はそこなのかなと思っています。

―― 私もフォーラムに手を挙げたほうなので、8 名だったということにびっくりしてしまいました。でも、関心がある方はもっとたくさんいると思うのですね。やはり、自分の視野を広げていくということを一生懸命考えて、行動していくことが大切だと思います。

もうひとつは、私たち市民というのは、原子力に限らず、専門的な話に対しては受身なのですよね。できましたら、専門家の方がいろいろ情報を出して下さると、もっと我々はそこにたどり着けるのかなと思っております。

―― 専門家の立場から言うと、これは情報発信に尽きるのではないかと思います。なかなかたどり着けないという話は確かにあって、我々としても、限られた媒体でしか情報が発信できない。例えば、我々のやっている研究で、テレビ関係者の人と話をすることもあるのですが、「動かない絵は要らない（話だけ面白くても駄目）」ということを言われたりして、なかなか取り上げてもらえない場合があります。

そういうことも含めて、我々としてもできるだけ情報発信の機会をつかんで、情報発信をしていく。その際には、聞く相手のことを意識して、できるだけ分かりやすいように伝えていく。そういうことを心がけながら情報を伝えていくということが大事かと思っています。

（谷口） いろいろあるかとは思いますけど、対話する機会があるときに、その時々の相

手について、あの人はどんなことに関心があるのだろうかということを事前にいろいろ考えることは、やはり大切なのではないかと思います。それは様々なところでそれぞれ違います。だから、先ほどお話があったように、相手に対して関心を持つということが重要なのだろうなと思います。

あとは、こういう活動を始めたら、腹を据えて、もう終わりはないと思わないといけない。どこかに終わりがあると思ってやっていると駄目なのだろうなとは思います。私も NPO をやっていて、いつになったら抜けられるのかと考えているのだけど、抜けられないのだろうなと思いますね。この活動も、そういうことになるのではないかと思います。

（木村）　パネリストの皆さん、ありがとうございました。それでは質疑応答はここまでとさせていただきます。

次年度に向けての課題と抱負

（木村）　最後に、次年度に向けての課題と抱負を申し上げたいと思います。

次年度に向けては、今日いただいたいろいろな課題、テーマ選定の話や、進め方の課題などをクリアしながら、よりいいものを作っていきたいと思っております。

最後に谷口先生から、抜けられないというお話をいただきましたが、私もそういう覚悟を持って、しっかりとこういう課題に取り組んでいきたいと思っております。

原子力と社会、科学エネルギーと社会というところで、「信頼」という言葉が大きなキーワードになっています。今、信頼が失われている状態で、その中でいかに次のステップを踏みだすのか。ここに対して、解決とまでは言わないけれども、こうすれば少しでもいい答えが一緒に見つけていけるのではないか。そういうことを学問的にも明らかにして、実践として活動を続けていければと思っております。

今回参加していただいた 20 名の方にも恥じないように、頑張っていきたいと思いますので、これからも末永くお付き合いいただければと思います。

これで後半のパネルディスカッションを終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

（司会）　どうもありがとうございました。